

# アニメで知る心の世界

こもれば心の診療所 羅田 享

## 今回扱うアニメ作品：空の青さを知る人よ 6回目

### 今回のテーマ

#### きょうだいトラウマとエディプスコンプレックス

##### はじめに

「空の青さを知る人よ」は、両親の突然の死という喪失体験に伴い、年の離れた姉妹であるあおいとあかねの関係が、本来の姉妹関係から親子関係（保護者と被保護者）へと変容していく物語である。この過程で生じた姉妹間の情緒的葛藤は抑圧されたまま、あおいは成長を続ける。

あおいが、高校2年生となり成人への移行期を迎えた中で、長年抑圧されてきた情緒的葛藤が再浮上する。この変化の過程で生じる心理的葛藤、特にあおいの内面に芽生えるあかねへの競争心、劣等感、そして罪悪感、まさにきょうだいトラウマの典型的な症状として理解することができる。そこにあかねの元恋人である慎之介が帰郷し、今まで置き去りにしてきた様々な感情と向き合うことになる。

今回、きょうだいトラウマとエディプスコンプレックスという概念を通して本作品で描かれている、きょうだい関係の複雑さと、そこに生じる喪失からの離脱・再建の過程について考察していきたい。

### 今回のテーマ

#### I. きょうだいトラウマの理論

II. あおいの発達過程における退行と再挑戦

III. 「しんの」の象徴的意味とエディプスコンプレックス

IV. 慎之介の喪失と都市での挫折

V. 三者それぞれの「再生」の物語

VI. まとめと「井の中の蛙」の多層的解釈

I. きょうだいトラウマの理論的背景

1) ジュリエット・ミッチェルの「きょうだいトラウマ」

ジュリエット・ミッチェルの「きょうだいトラウマ」は、きょうだい関係に固有の心理的構

造を明らかにした概念である。その中核には三つの特徴がある。

第一に、きょうだいは「自分と同じ場所を共有する分身のような存在」でありながら、同時に「自分を脅かす別の個体」でもある。この「似ているけれど、決定的に違う」という矛盾が、心理的な混乱を引き起こす。

第二に、心理的に「消去される」「居場所を失う」という排除の恐怖である。これは単なる比喩ではなく、幼児にとっては自らの存在価値の否定が「物理的な死」に直結するかのような、根源的で圧倒的な不安として立ち現れる。

第三に、愛する対象（親やきょうだい）との競争という、矛盾した感情の共存である。

ミッチェルはこの理解のため「母の法」概念を提唱した。ラカンの「父の法」が父-子の垂直的關係における言語と象徴秩序への参入を表すのに対し、「母の法」はより原初的な禁止を含む。新しいきょうだいが生まれると、幼児は排除の恐怖から殺意を抱くが、母はこれを禁止する。この禁止が「母の法」の核心であり、限られた母の愛情を分かち合う「水平的な社会関係」の基盤となる。

「母の法」には明確な階層や言語化された規則はなく、共存と妥協、嫉妬と連帯が混在する言語化以前の次元である。きょうだいトラウマは、こうした水平的関係における平等と差異の葛藤から生じ、垂直的なエディプス的關係とは異なる心理的課題を提示している。

きょうだいトラウマが最も顕著に生じるのは、2歳から4歳頃の幼児期といわれる。

そしてこの物語は、両親の死によって抑圧されてきたきょうだいトラウマが、あおいの自立・独立を契機に再び湧き起こり、その情緒的課題を巡って展開される物語である。

## II. あおいの発達過程における退行と再挑戦

映画『空の青さを知る人よ』の姉妹関係は、両親の死を境に劇的に変容した。幼少期のあおいは、慎之介を巡る「対等なライバル」として姉・あかねとの居場所を確保しようとしたが、両親の死により姉妹は「保護者と被保護者」という擬似的な親子関係に閉じ込められる。あかねが自己犠牲的に完璧な母性を体現したことは、あおいの生存を支えた一方で、彼女に「姉には決して敵わない」という劣等感と、姉を束縛しているという深い罪悪感を植え付けた。

完璧な姉と比較され続ける日々は、あおいにとって自らの存在価値を否定され、心理的に

「消去」されるような根源的な不安を伴うものであった。彼女が抱く東京への執着や閉塞感  
は、この自己否定から逃れるための躁的防衛といえる。

そのような中、大人の姿の慎之介と、高校生の姿をした生き霊「しんの」が現れる。「しん  
の」は、あの日三人が置き去りにした情緒的葛藤の具現化である。あかねが上京を断念した  
際、あおいが抱いたはずの「姉から慎之介を奪いたい」という殺意にも似た嫉妬と、「それ  
でも姉を独りにはできない」という愛。この激しい矛盾こそがミッチェルのいう「きょうだ  
いトラウマ」の正体であり、物語は「しんの」との対峙を通じて、抑圧された水平的関係の  
再構築へと向かっていくのである。

### Ⅲ. 「しんの」の象徴的意味と三角関係の再構築

#### 1) 「しんの」の心理学的機能

生き霊「しんの」の出現は、あおいに真の心理的成熟を促す重要な転換点となる。精神分析  
的視点では、しんのは「父的存在」、あかねは「母的存在」として機能し、あおいは二人の  
間で長年回避してきたエディプス葛藤に向き合うことになる。

特筆すべきは、「しんの」が現実の大人ではなく、過去から現れた「安全な」存在である点  
だ。あおいは心理的リスクを抑えた状態で自らの感情を探求でき、その過程で「保護される  
妹」から「愛する対象を持つ一人の女性」へと発達段階を移行させていく。

「しんの」という媒介があるからこそ、あおいはあかねとの関係を破綻させることなく、抑  
圧してきた対抗意識や嫉妬を統合できる。つまり「しんの」との対峙は、姉への依存を脱し、  
一人の自立した存在として、あかねとの「水平的な関係」を再構築するための不可欠なプロ  
セスなのである。

#### 2) 三角関係の再構築

しんの」の出現は、硬直していた姉妹関係に「健全な三角関係」を復活させる。あおいが  
「しんの」への恋心を自覚し、告白を決意したことは、単なる過去への執着ではない。それ  
は、姉に保護される「子ども」の立場を脱し、慎之介を巡る一人の「競争者（女性）」とし  
て自立し始めたことを意味している。

興味深いのは、あおいのこの積極性が、逆説的にあかねと慎之介の停滞していた関係をも動かした点である。あおいの成長に触発されるように、あかねもまた「妹の保護者」という役割から解放され、一人の女性として慎之介と向き合う契機を得る。

このように、あおいが競争者としての自分を受け入れるプロセスは、姉妹が互いに「母と子」という役割を降り、一人の女性同士としての「水平的な関係」へと移行するための、不可欠なステップとなっているのである。

### 3) 複雑な思いとの向き合いと「しんの」の緩衝的機能

あおいが抱く「しんの」への恋心は、姉への申し訳なさや、現在の安定した関係が壊れることへの不安といった、微細で複雑な葛藤を引き起こす。ここで重要なのは、「しんの」という存在が、これらの強烈な葛藤を和らげる\*\*「心理的緩衝装置」\*\*として機能している点である。

もしあおいが、現実の慎之介に直接的な情動をぶつけていれば、姉との関係は修復困難なほど激しく衝突した可能性がある。しかし、13年前の姿である「しんの」は、時間的な距離という安全性を担保している。あおいは「過去への憧れ」という形をとることで、心理的リスクを最小限に抑えながら、抑圧してきた自らの感情を安全に再体験し、検証することが可能となったのである。

帰郷した慎之介もまた、自身が抱えるジレンマと格闘している。この「しんの」を媒介としたプロセスのなかで、あおいとあかね、そして慎之介の三者は、あの日置き去りにした感情を再び掘り起こし、それぞれの止まっていた時間を動かし始めることとなる。

生き霊のしんのにあおいが自分の思いを伝えるシーンを取り上げる。

土砂降りのなか、あおいはしんのいるお堂にむかう。

あおいが勢いよく戸を開けたところでしんのは驚いて振り返る

しんの：な、なんだよ、あおかよ……合言葉はどうした、合言葉は。まったく驚かせ…

(しんのの言葉を遮ってあおいは言う)

あおい：あたしはしんのが好き

しんの：その、お前の気持ちは嬉しいよ。でもよ、よく考えてみろ。俺は生き霊で

あおい：黙っていて！！

あおい：…だって、しんの声、優しいんだもん。そういう声音（こわね）の人はなんか、  
こういうとき、慰め的なこととか哀れみ的なこととか言うんだもん。一般的に！

しんの：え？

あおい：慰めとか、そういうんじゃないとしても、しんの声は素敵で、暖かくて、な  
んか…胸が痛くなるから聞きたくない

あおい：とりあえず、あたしの気持ち、全部話させて

あおい：あたしはしんのが好き。＜慎之介＞じゃなく、今ここにいる＜しんの＞がすきな。

あおい：ずっと一緒にいたい。＜慎之介＞の中に戻っちゃうくらいなら、今のままでいてほ  
しい

しんの：あお……

あおい：だけど……

あおい：だけど！あたしは、あか姉も大好きなんだ！

あおい：あか姉は＜慎之介＞のことがまだ好きなんだよ。あか姉の幸せを考えたら……

あおい：でも、そうしたら、しんのが

あおい：もうどうしていいかわかんない！！ねえどうしたらいい？

しんのは無言のまま、あおいに静かに手を伸ばす

あおい：触らないで！！ 触られたらドンドン好きになっちゃうじゃない！！

しんの：じ、じゃあどうしたらいいんだよ。

あおい：しんのも解らないの！？

しんの：わかるかよっ！！

あおい；じゃあ、もういい！！

あおいはきびすを返してお堂を飛び出す

しんの：待って！ 頼むからっ！

あおいが振り返るとしんのがお堂の入り口にへばりついてた

しんの：頼むから、待ってくれよ。俺は追いかけられねえんだ！ お前を追いかけたいと思  
っても無理なんだ。ここから見送ることしか出来ねえ。俺も、もとの自分に戻ってどうな  
っちゃうのか、全然わかんねえけど。でも、こうやってガキみたいに泣いているあおを見送  
ることしか出来ねえのは……

あおい：泣いてないし 泣いてないし、雨だし

あおいは涙をなんども拭って駆け出した。しんのはもう何も言ってこなかった。

## IV. 慎之介の喪失と都市での挫折

### 1) 理想化された記憶からの乖離

#### 13年前の慎之介（しんの）：

13年前の慎之介（しんの）は、あおいとあかねの記憶の中で理想化された存在として保たれていた。音楽への純粋な情熱を持ち、キラキラと輝く青年として、二人の心の中に刻まれていたのである。特にあおいにとって、彼は憧れの対象であり、自分も同じような道歩みたいという夢の源泉でもあった。

また、当時の慎之介は無数の可能性を秘めた希望の象徴として機能していた。東京での成功を夢見て旅立っていく彼の姿は、あかねにとっては共に歩むはずだった未来への憧憬を体現する人物であった。あかねもまた、現在のあおいと同様に秩父という限られた環境から脱出し、より広い世界で自分の可能性を試したいと願っていたのではないかと考えられる。しかし、両親の突然の死により、あおいを庇護する役割を果たさざるを得なくなり、その夢は断念せざるを得なくなった（それがあおいの罪悪感に繋がるのだが）。

13年という歳月が過ぎ、現実の慎之介と再会することで、この理想化された記憶と現実との間に大きな乖離があることが明らかになる。記憶の中の輝かしい青年像と、目の前にいる物憂げで複雑な感情を抱えた大人の男性との間には、埋めがたい溝が存在していたのである。この乖離は、あかねにとっては自分が諦めた夢の現実を突きつけられる瞬間でもあり、あおいとあかねの複雑な感情の源泉となっている。

#### 現在の慎之介の現実

一方、現在の慎之介は、音楽業界での厳しい現実と向き合った結果、深い疲弊を抱えた人物となっていた。かつて抱いていた純粋な音楽への情熱は、生活のための妥協や挫折によって曇らされ、理想と現実のギャップに苦悩する中年男性の姿がそこにはあった。13年前の輝かしい青年は、物憂げで複雑な感情を抱えた大人へと変貌していたのである。

メジャーデビューの夢は叶わず、現在はバックミュージシャンとして生計を立てる日々。

音楽で「天下を取る」という壮大な夢は遠い過去のものとなり、現実的な選択を重ねながら生きてきた彼の姿は、あおいが理想化している「東京で成功する音楽家」像とは程遠いものであった。

この13年前と現在の慎之介の対比は、時間の経過による必然的な変化でありながら、あおいとあかねにとっては「理想の喪失」として受け取られることとなったようにも考えられる。

## 2) 帰郷による内面の再活性化

慎之介の故郷への帰郷は、彼の内面に大きな心理的变化をもたらすこととなった。13年間封印していたあかねへの感情が、再会をきっかけに再燃し始めたのである。東京での挫折と疲弊に覆われていた彼の心に、かつて抱いていた純粋な愛情が蘇ってきた。

また、成長したあおいの姿を通じて、慎之介は自分自身の変化を客観視することになった。かつて音楽への情熱に燃えていた自分と、現在の現実には妥協している自分との対比を、あおいの純粋な夢への憧れを見ることで痛感したのである。あおいの中に、失われた自分の一部を見出すような感覚を覚えていたのかもしれない。

そして最も重要なのは、故郷の空気の中で、かつての「しんの」としての感情が復活したことである。東京での複雑な現実から離れ、あかねやあおいと過ごす時間の中で、慎之介は13年前の純粋で希望に満ちた青年としての感情を取り戻していく。この感情の復活は、彼が本当に大切にしたいものが何かを再認識する契機となり、人生の選択を見直すきっかけを与えたのである。